

王 毓雯（中国文学）

蒋士铨戏曲研究

本論文は、清代中後期の著名な劇作家蒋士铨の戯曲作品について、袁枚や江春等との人間関係、文字獄に象徴される時代風潮、更には湯顕祖や婁妃をめぐる江西の風土といった諸観点から分析を加え、作品の意図や成立の背景を明らかにしようとしたものである。

本論文は、序章において宋代より蒋士铨に至る戯曲研究史の概要を述べ、結章において総括的に論述するほか、以下の六章から構成される。

第一章は、本来“怪力乱神を語らない”はずの蒋士铨の戯曲に特徴的に現れる鬼神の描写が、実は勧善懲悪・因果応報といった概念の下に注意深く描かれていることを、“鬼神を語った”袁枚や羅聘等の友人知人の場合と比較しつつ、具体的に解明しようとした。

第二章は、蒋士铨の故郷江西の大先輩で、明代を代表する劇作家湯顕祖に取材した戯曲『臨川夢』について、特に顕著である「忠孝」の概念の由来について分析した。論文に拠れば、蒋士铨は、顕貴に阿らない硬骨漢の湯顕祖に自分の像を重ねている。

第三章は、自らも詩文を善くした揚州の塩商江春の庇護の下で、蒋士铨が『四絃秋』『雪中人』『香祖楼』『臨川夢』等の戯曲を完成させたこと、特に白居易「琵琶行」に基づいた『四絃秋』は、直接に江春の依頼を承けて成ったこと等を明らかにした。

第四～五章は、明の寧王宸濠の妃である婁妃に取材した戯曲『一片石』『第二碑』『採樵図』に基づき、宸濠の乱において諫死した婁妃の史実を踏まえ、蒋士铨が江西の地方志に婁妃故事を顕彰した意図について、「怨」と「忠」の観念から明らかにしようとした。論文に拠れば、ここでも蒋士铨は婁妃の生き方に自らの文学主張を重ねている。

第六章は、蒋士铨の戯曲制作と清朝文字獄の関係を、友人彭家屏が被った文字獄の実例について具体的に分析した。論文に拠れば、蒋士铨が『第二碑』に描写する錢公は、実は彭家屏をモデルにしており、当時さほど追求が厳密でなかった戯曲中に、巧妙に“被告”彭家屏を影射している。清朝文字獄をめぐる文人の生き方については、従来の研究は相当に進んでいるが、本論のように具体例に踏み込んだ研究は新鮮であり、貴重である。

蒋士铨研究は、青木正児『支那近世戯曲史』を嚆矢として、王健生『蒋心餘研究』、簡有儀『蒋士铨及其詩文研究』等があり、それぞれ特色がある。その中であって、本研究は、蒋士铨の詩文や戯曲を丹念に読み込み、作品に込められた「忠孝」の文学主張を、文字獄等の社会背景や江西の風土に絡めて実証的に明らかにした点に特色がある。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分であると認めるものである。